

「チュラロンコン大学サマースクール参加報告書」

京都大学総合人間学部2年齊藤喬

チュラロンコン大学でのサマースクールでは、主にタイ語の授業やタイの歴史や文化についての講義、日本語を学んでいる学生との共同発表、アユタヤなどでの実地研修があった。共同発表では、チュラの学生と大学の食堂を比較して互いの良いところを発表した。タイ語の授業では、タイでの生活に必要な役に立つ表現や単語を学習した。買い物するときやタイ人と話す時に使うことができた。声調が難しく、相手に確実に伝えるにはもっと学習が必要だと感じたが、少しでも伝わると相手の方が笑顔で返してくれ、非常に楽しかった。外国語を学習するおもしろさを感じた。

私がタイに行き1番強い印象を受けたのは、バンコクの様子であった。私が行ったチュラロンコン大学は、首都のバンコクの中心部にあり、その周辺は私の予想以上にとても発展していた。高層ビルが立ち並び、多くの車やバスが走っていて、道路もきれいに舗装されゴミも少なかった。ビルの中も、高級店舗が多く入っており、買い物客でにぎわっていた。その一方で、中心部から少し離れると、路上にゴミが散乱していたり下水が垂れ流されていたりしている地域もあった。さらに、タイの国鉄の線路沿いには、スラム街が形成され、そのスラム街とビル街を隔てるための高い壁ができており、スラムが隔離されているような都市構造になっていた。そこには貧困者が集住し、隔てる壁を作ることでその地域をビル街から見えなくしているようであった。国鉄の車両の中からスラム街が少し見えたのだが、洗濯屋や食事屋、衣料品店などがあり、子供たちが楽しそうに遊んでいた。国の経済発展が生み出した経済格差により、そのような負の側面が表れていた。しかし、その中でもコミュニティができあがり、生活がしっかりと営まれていたことが印象的であった。私たちは、経済発展という良い点にだけ注目しがちであり、そのような負の側面からは目を遠ざけてしまいがちである。しかし、今後の国のさらなる成長を考えた時に、このような点と向き合っていかなければいけない。今回の滞在の中で私は、その負の側面を自分の目で見ることは、非常に意義深い。私たちは今日本で比較的裕福な暮らしをしているが、そのような人がまだたくさんいることを忘れてはいけないと強く感じた。

しかし、どこでも、タイの町は活気にあふれており、タイ料理は非常においしく、彫刻がきれいな寺院がたくさんあった。また、このプログラムではタイの学生のみなさんと交流して話をする機会がたくさんあった。その中で、彼女たちが、普段タイに住んでいてどんな生活を送っていてどんなことを考えているのかなど、実際にタイに住んでいる人から話を聞くことができた。タイの国王の写真が町中にたくさん飾ってあり、タイ国王を弔った寺院もあった。このように、日本と異なる点が多くあり、タイ人と国王との関りの深さが非常に興味深かった。私は、将来は国際政治学を専攻したいと考えている。その中で、今後経済発展をさらに遂げていき、国際政治の中での役割を増していくであろう国の課題や現状を、自分の目で見ることもできた。そのため、今まで以上に国の経済発展と政治とのかかわりについて興味を持った。

私たちは、普段の自分の生活を基準に物事を考えてしまっているが、それではその地域の真の姿を正確に把握することはできないと思う。この派遣を通して、私は、その国の人々の生活の様子を自分の目でしっかり見て考えることが非常に大切であると感じた。人々の生活や行動にはその人々の考えが反映されており、それを読み解くことで、その国のおもしろいところや特徴が見えてくると感じた。その読み解く方法の1つが、現地の人と会話し様々な生活空間を見ることであると考えている。タイでの2週間の生活でこのことを強く感じた。今後、社会の発展を考えていく中で、自分の目で人々の生活をしっかり見て考えるということ強く意識したいと感じた。